

白藍塾オリジナル

2018入試小論文分析&解答のヒント

2018年4月発行

白藍塾の入試小論文分析は、他の予備校と違って、その問題に対して受験生がどのようにアプローチすればよいのかを具体的に説明している。そのため、この分析を参考にすれば、誰でも合格レベルの答案を書けるはずだ。該当の大学・学部の志望者は、ぜひ、これを読んで、自分で実際に答案を書いてみてほしい。

執筆・大原理志

●慶応・文学部

課題文は、アレントやフーコーといった哲学者の名前が頻出する上に、意志や権力について哲学的な議論が展開されているので、こういった文章に慣れていない人はとまどうかもしれない。とくに厄介なのが、「中動性（中動態）」という聞き慣れない言葉が何の説明もなく使われていること。正直、この課題文だけでは「中動性」を理解するのは無理なので、この言葉は無視するほうがよい。ただ、カツアゲや便所掃除といった具体例はわかりやすいので、筆者の言う「人間の行為において、『する』と『される』を対立的に捉えることはできない」という考え方そのものは、理解しやすいはずだ。

例年通り、要約問題と小論文問題の2本立て。設問Ⅰは全文要約だが、アレントのアリストテレス批判の問題点を指摘した上で、フーコーによる「暴力」と「権力」の区別を説明し、人間の行為が決して「する」と「される」の対立では捉えられないことを示せばよい。

設問Ⅱは、課題文を踏まえて、「自由」についての考えを述べるのが求められている。課題文には、「自由」という言葉自体はキーワードとしては出てこないが、「意志」「自発的」「能動性（する）」といった用語がそれに近い意味合いで使われている（それと対立するのが「非自発的」「受動性（される）」といった用語）ので、筆者が「自由」についてどのように考えているかは類推できるだろう。「する」と「される」をめぐる筆者の議論を踏まえると、筆者は「完全な自由はないが、完全な不自由もない。人間の自由はつねに制約された自由であって、自由と必然は対立しない」と考えていることがわかるはずだ。もう少し踏み込んで言えば、「制約された自由の中にこそ、真の自由の可能性を見て取るべきだ」というのが、筆者のメッセージだろう。

したがって、そうした「自由」の捉え方が正しいかどうかを問題提起するのが正攻法だ。

イエスの立場から、そうした制約された自由のあり方について論じるのが、やはり書きやすい。自分が自由に話したり行動したりしているつもりでも、じつは他者の言動や環境に強く影響されていることはよくあることだし、そうした事例に即して論じることもできるだろう。課題文に倣って、自由と不自由（必然）を対立的に考えることの問題点を説くこともできる。また、「制約や制限の中で、自分にできることを探すところに、真の自由の可能性がある」などのように論じることも可能だ。

もちろん、ノーの立場に立って、「絶対的な自由を認めなければ、人間の自由意志も存在しないことになる。それでは、誰も自分の言動に責任をとれなくなってしまう」といった論じ方をしても、十分説得力のある論になるはずだ。

今年度はやや哲学的なテーマに寄ってはいるが、出題形式や設問の内容などはここ数年の傾向通り。しっかりと対策をしてきた受験生にとっては、それほど難しいとは感じられなかっただろう。

©執筆者の許可なく本紙の全部もしくは一部を無断転載、無断複写することを固く禁じます。

発行・白藍塾総合情報室 (03-3369-1179) <https://www.hakuranjuku.co.jp>